

---

# 嘘と罰

三八式歩兵銃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

嘘と罰

### 【Nコード】

N2457R

### 【作者名】

三八式歩兵銃

### 【あらすじ】

養父・信之と、義理の娘・春香の他愛も無い日常です。

20歳前後離れている歳の差の男女が織り成す、擬似家族ストーリーです。

## 年甲斐も無い行動は控えて頂戴。

テレビをつけていても面白い番組は無かったし、何もせずリビングにいただけというのも嫌だった。宿題はもう片付けたので、正直何もやる事が無い。

リビングの壁にある時計に目をやると、十時を少し回ったところだった。

無意識のうちに漏れていた溜息に気付き、私は咄嗟に周囲を見回す。何箇所か視線を配った後に、溜息の原因を作った相手が今は居ないという現実に取り戻された。

たまに帰りが遅くなる同居人は、日付が変わった後に帰ってくる事もある。本当なら少し位は帰りが遅くても、私は余り気にしなかった。

だけでもそれは……、その旨を知らせるメールや電話が必ずあったからであり、今日は少し勝手が違う。

ずっとポケットに入れている携帯も鳴らないし、メールの着信も知らせてくれない。

テレビもつけていない静かなリビングの中で、私はただ一人何をするわけでも無く、黙ってソファに座っているだけだ。

既に嫌な気分で一杯になっている私には、外から聞こえる雨音ですら鬱陶しく感じてしまう。気分転換に出掛けるには時間も遅いし、出て行っても向かう場所が思いつかない。それに……、もし私が黙って出掛けている間に、彼が帰ってきたら間違い無く心配させてしまう。

ただですら私は彼に迷惑を掛けている。だから “ 何の連絡も

無く、帰りがいつもより遅いから”といった幼稚じみた理由で、感情に任せて動く気にもなれなかった。

「全く……、いい歳した大人が子供に心配かけさせないでよ……」  
黙っているだけでは気が収まらなかったのも、つい声に出して悪態を漏らしてしまう。でも、その悪態の相手はまだ帰ってきていないのだから、別に何を言っても構わないと開き直る事にした。

少し間の抜けたチャイム音がリビングに鳴り響いたのは……、  
帰りの遅い同居人への愚痴を私が一通り呟いた後だった。

「はい」

「ただいま。すまない、手が塞がっているから開けてくれないか？」  
インターホンから聞こえてきた声は、低い男性の声だった。良く聞きなれた声はこの部屋の主のもので、私が帰りをずっと待っていた人のものだった。

ただ……、ここは彼の住む部屋だから鍵は勿論持っているし、“両手が塞がっているから開けてくれ”なんて初めて言われたから、反応に困ってしまう。

「……駄目か？」

私が首を傾げている様子でも分かったのか、もう一度彼の声が受話器越しに耳へ届く。

私に断られるとも思っているのだろうか？ 断る理由なんて勿論無いし、それに……、今日は冬の長雨で気温も随分と下がっている。

一言だけ『今開けるわ』と言って、私は玄関へと向かった。  
閉めていた鍵を開け、ドアノブに力を込めてドアを開ける。  
と、ここまではよかった。

だけでも、見慣れた彼の笑顔と共に私の視界に入ってきた数匹の  
“あるもの達”を見て、私は素早く玄關のドアを閉めた。

「おい！ ちょっと待って……！」

流石に開けた直後に、速攻閉められるとは思っていなかったのだ  
ろう。

珍しく慌てた声とドアが閉まる音は、残念ながら重ならなかった。  
ドアが閉まる音の代わりに、「痛え……」という呟きが私の耳に入  
る。足元を見ると、ドアの隙間に見慣れた大きな革靴が挟まってい  
る。咄嗟に足を出して、ドアが閉まらない様にされていたのだ。

「……足、どけてくれない？ 閉まらないんだけど？」

「お前なあ……」

「……何？」

ドアの隙間から私を見下ろしている相手に向かって、わざと私は  
笑顔で返す。

閉める時に力を入れ過ぎたかもしれない、と思ったのは彼の顔が  
僅かに歪められていたからだ。少しだけ悪いという気持ち湧き出  
たものの、彼の腕に抱かれて呑気に鳴いている生き物達の存在を見  
ると、そんな感情は数秒経たず、何処かへ飛んでいってしまった。

「それは、何ですか？」

英語の先生が質問する時の様な口調で言つてやると、彼は少し不  
機嫌そうに眉を寄せた。

「見て分からないか？」

「私には猫に見えるわね」

「正解」

「それで？ 何故おじさんはそんな猫達を抱いているのかしら？」

「それは……」

私から目を逸らして、彼の視線は宙を漂っている。ようやく、私

が何を言いたいのか解ってくれたらしい。

「……入れちゃ、駄目か？」

「駄目」

私が即答すると、彼は大きい身体に似合わず肩を落として俯いた。

「だって雨の中、捨てられていたんだぞ……可哀想じゃないか」

「このマンション、ペット禁止なんだけど？」

駄目な理由を私が強く告げて、小さく『でも……可哀想じゃないか』ともう一度呟かれる。ちゃんと社会人らしくスーツにコートを羽織っている姿にも関わらず、何を小学生みたいな理由で子猫を連れてきたのだろう？ さらには私を養ってくれている相手なのだが……、まるで大型犬でも叱っている様な錯覚に陥ってしまう。

「勿論、飼わないけど……里親見つけるまでの保護でも駄目か？」

「……あのね、誰が面倒見るの？」

「俺がちゃんと、面倒見るから……」

「会社行ってる間はどするの？ 結局私が面倒見る事になるんでしょ？」

「それは……」

本当にこの人は四十前なのか？ と反論していて頭痛がしてくる。玄関とはいえ、外とは全然違う暖かい温度なのに、いい加減開いた隙間から流れてくる空気に冷やされる。少し寒いかな……、と思つて力を緩めた時だった。

挟んでいた足を大きく動かし、開いた間から彼が身体を滑り込ませて玄関へと入ってきた。

「ちよつと！」

私の声は閉まったドアの音と、隣に立っている彼の腕から聞こえてくる子猫の合唱によって掻き消された。

「……お前が入れてくれないから、俺もこいつらも寒かったんだぞ」  
そう言つて少し困った様に微笑む彼の顔を見て、私は何も言えなかった。

彼は朝持っていた筈の傘は持つておらず、その代わり少し乱れた

髪からポタポタと雫が肩に落ちている。彼の顔からさらに視線を下へ降ろすと、雨を吸ったコートからも雫が落ちてタイル張りの床を濡らしている。

鞆を脇に挟み、コートを着た腕に抱かれている三匹の子猫のうち一匹は、コートのボタンとボタンの間から顔を出して私の方を不思議そうに見つめていた。

多分、傘もささず自分だけ雨に濡れて、子猫達はコートの中に入っていたのだろう。

そんな事位、私じゃなくても解る事だ。

だけでも、ただ“可哀想だから”という理由だけで、この時期の……、しかも雨の日に、この人は本当何をやっているのだろうか？

「取り合えず、説教なら後で聞くから……タオル、頼んでもいいか？」

全く悪びれた様子も無く当たり前前の様に言われて、私は何も返事を返せない。

「ハル……怒ってるのか？」

私が無言だった事に対して、怒っていると判断されたのだろう。

少し遠慮気味に名前を呼ばれる。だけでも、私は何も答えなかった。さつきまでは連絡も寄越さず遅くなった上、子猫まで無神経に連れ帰ってきた事に腹立たしかったのは事実だ。でも、今は何だかそんな事で怒るのが馬鹿らしく感じていた。

ただ素直に許してしまうのも釈然としなかったので、私は履いていたサンダルを乱暴に脱いで無言で脱衣所までタオルを取りに行く事にした。

少し慌てた様子でもう一度名前を呼ばれるが、関係無い。少し位は私が怒っていた理由を悟って反省してくれればいいと思う。

脱衣所にあったバスタオルを掴み、玄関へと戻ってきたところで、私と彼の眼が合った。

少し肩を落として濡れた身体を丸めている様子は、やっぱり何度見ても大型犬のそれにそっくりな印象がある。私みたいな高校進学

前の子供に怒られて、気落ちして……、全くもって年齢と社会的地位と、図体がまるで噛み合っていない。

「ハル……」

「……なによ？」

「お前は俺にとって一番の存在だから、そんなに妬くな。俺はお前を世界一愛しているぞ」

「……………」

呆れ果てて、絶句してしまった。

多分、愛情表現に関する語彙が極めて乏しい彼なりの言葉なのだろう。これが、養女として迎え入れられている私に向けての、父親代わりを勤める者として精一杯の表現なのだろう。

だが……、どう考えてもその使い方は間違っている。

そして、その間違った使い方をした言葉を、間違った方向に捉えてしまう私も私だ。

身体が熱を帯び、頬が赤くなるのが自分でも分かる。

ただ、そんな私の様子を見てさらに変な言葉でも投げ掛けられると、とてもでは無いが精神が持ちそうに無い。

だから、

私は渾身の力を込めて、全くもって不器用な養父の顔面へとバスターを投げつける他無かった。





さよならと、おわかれと

玄関に並べて置いてあった革靴を見た時、春香の思考は停止した。

まだ幼さが残る可愛らしい顔にいぶかしげな表情を浮かべ、春香は今朝学校に行く時には無かった筈の靴へと視線を落とす。勿論靴の持ち主は誰だか解っているが、本来ならばこの時間帯には無いものなので、思考が固まってしまった。

靴を脱いで上がる前に、コートのポケットに入れた携帯電話を取り出して着信を確認する。新着メールも無ければ着信も知らされていない画面は、普段と同じもので何ら変化は無い。

玄関先で部屋に居るであろう人物の名を叫ぶのは簡単だが、こちらの声に気付いてやって来る保証など全く無かった。

仮に、この時間帯に居る筈も無い人間が帰ってきているという事は、体調でも壊したのかもしれないという可能性がある。それか何らかの急用があつたのか？

疑問が残る頭の隅でそれらの事を考えながら、黙って春香は靴を脱ぐ選択を取った。

もしも同居人が寝ている場合を考慮して、春香がなるべく物音を立てない様に注意を配ろうとした矢先の事だ。

リビングの方から聞こえてきた、誰かと話している様子の声が耳に入る。その声を聞いた瞬間、不安気な表情を浮かべていた春香の緊張が解けた。どうやら体調が悪くて戻って来た様子では無いと分かった春香は、ほっと安堵する。

だが……、足を進めるにつれ耳に入る会話の内容を把握するうちに、

彼女の顔は怒りで真っ赤になり、リビングのドアを乱暴に開く事となった。

「お前達、なかなかいい肉球筋だ。だが、今度は俺も本気で挑ませて貰うぞ！」

低く、くぐもった声で何やら言っている様子は、独り言に聞こえなくも無い。だが、床に胡坐を掻いたままの姿勢で身体を丸めている信之の肩には、黒い小さな生き物が一匹乗って器用に座っていた。信之の腕が激しく動く度に小さな身体も跳ねる位に上下するものの、全く動じる気配も無く、肩に乗ったままの姿勢を維持している。

「くつ、この攻撃ですらガツチリとキャッチか……。どうやら俺はお前達の実力を侮っていたようだ。ならば今度こそ……………」

肩に乗っている子猫以外の兄弟達はというと、信之の大きな手に握られている猫じゃらしを必死になって二匹で追いかけて回っていた。余程興奮しているのか、丸い目はさらに爛々と輝いていて、尻尾の毛も逆立っている。

「あーっ！ くそっ！ この高さでもジャンプキャッチか……………将来有望だぞ、お前た」

「ち」と続けようとした信之の言葉は……………乱暴に開いたドアの音と、彼の背後へ無言で近寄ってくる春香の足音によって遮られた。

「おかえり」

背後に立ったまま何も言わない春香へと向かって短く言うと、信之は肩に乗っている子猫の邪魔にならない程度で振り返った。

別段驚いた様子も無く平然としている信之とは対照的に、春香は外から帰ってきた格好のまま、腕を組んで信之を睨み付ける。信之の言葉にも、返す気は無かった。

彼女から漂ってくる気配は鬼気迫るものがあつたが、三匹の子猫達は気にならないらしい。動きを止めた猫じゃらしに必死に手を伸

ばしたり、遊びに飽きて信之の足の間に入ったり、寝たまま動かなかったりで、それぞれの行動を行っている。

そんな子猫達には目を向けず、春香はようやく言葉を放った。

「……何してるの？」

「こいつらを特訓してた」

「仕事は？ まさか……サボったの？」

「サボりとは人聞きが悪い。ちゃんと有給で帰ってきたから心配するな」

怒りを滲ませた春香の質問に対して、平然と返ってきた信之の言葉は聞いているうちに眩暈を覚える。知らず知らずのうちに、春香の口からは深い溜息が漏れていた。

春香の養父である信之が子猫を拾ってきたあの日から、丁度三週間近くになる。

幸い子猫とは言っても、既に各々が好きな様に動き回る程度にまで成長していた状態だったので、世話自体はそれほど苦労しなかった。

結局のところ、信之と比べて家に居る時間が多い春香が彼等の面倒を見る結果となっていた。

それでも退屈で暇を持て余して暴れる子猫達と遊んでいたのは、信之の方である。

『自分が面倒を見る』と言っていた手前、責任を感じ早めに帰宅しているのかと思ったらそうでも無いらしい。単純に“子猫と遊びたいから早く帰る”という信之の本音を垣間見た時には、子供じみた単純さに春香は呆れていた。

にも関わらず、今日みたいに彼が意味も無く仕事を休む事態を春香が想定していなかったのは、信之の年齢と仕事上の立場を考えての事だったのだが……。

「……もういいわ。何も聞かない、何も言わない……」  
思っていたよりも単純で子供じみた行動ばかりする養父に対し、  
怒鳴り散らさなかっただけでも成長したのかもしれない。  
そんな事を考えながら、春香はこめかみを押さえ、無邪気な  
笑顔を浮かべる養父に対して言葉を告げるのを止めた。

「ハル、出掛けるのか？」

春香が自室から出て、ドアを閉めた時だった。丁度それを見計ら  
った様に声が掛けられる。

声が聞こえた方に目を向けると、ソファーに腰掛けたままこちら  
を見る信之の姿があった。

春香が部屋に戻って勉強をしている間も、暫く子猫達と何やら遊  
んでいる声は聞こえていたのだが、今は飽きて疲れたのか静かに座  
っている。

彼の膝元へチラリと目を向けると、膝の上で三匹の子猫が仲良く  
固まって寝息を立てる姿があった。

「……買い物に行くの。今日は早めに晩御飯の準備しなきゃ、どこ  
かの不良中年が“腹が減った”って騒ぎ立てるでしょ？」

嫌味を混ぜた春香の一言を聞いて、信之の顔に苦笑が浮かぶ。ど  
うやら嫌味だと気付いているものの、言い返す気は無いらしい。

子供の様に幼稚な行動を取ったり、養女である春香から様々な説  
教を受ける反面、時にはこうして歳相応の態度を取られる度に、  
春香は戸惑いを覚える。

だが、あえてそれは口に出さなかった。

信之がこういう態度を取る時は、春香が何を言っても結局は受け流されるだけだ。それは数年の付き合いで嫌という程分かっていたので、春香は何も言わずリビングを抜けようと止めていた足を進める事にする。

「ハル」

二度目の名前を呼ばれ、動き始めた春香の足はすぐに止められた。「……何？ 買ってきて欲しいものがあるのなら、後でメールしてくれた方が楽なんだけど？」

「いや、そうじゃなくて……」

「じゃあ何？」

再び春香が信之の方を見ると、先程まで浮かべていた余裕のある表情は消えていた。

代わりに、珍しく戸惑った様子で口籠っている。

「……今日は出掛けず、こいつらと一緒にいてやってくれないか？」

「はい？」

「今は寝ているが、もう少ししたら起きると思うし……遊んでやってくれ」

「この子達と一緒に……？ 何で？」

信之が何を言いたいのか理解出来ず、春香は彼が落とした視線の先へと目を向けた。

膝の上で三匹一緒になって眠っている子猫達に目を落としたまま、信之はポツリと言葉を漏らす。最初は戸惑いがあつたらしく「あ……」と「その……」の二言を暫くは繰り返し、ようやく切り出したものだった。

「あのな……、多分こいつらのうち二匹と……、今日でお別れしないといけないかもしれない」

「里親が見つかったの？」

信之の口から出た意外な言葉を聞いて、春香は彼側へと寄り、膝上で寝ている子猫達を横から覗き込む。

「一応、会社で聞いてたんだが……“引き取りたい”って部下が言

つてきてくれてな、だから今日仕事が終わったら来るように言っておいた」

「二匹だけなの？」

「二匹が限界らしい。子供が欲しがっていたから、丁度良かったと言われたよ」

「よかったじゃない」

「……そうなんだがな」

明るく言い放つ春香とは対照的に、浮かない口調のまま返事が返ってくる。

「里親見つかつて、嬉しくないの？」

思わず聞き返すと、ようやく視線を上げた信之が一言だけ呟いた。

「……嬉しいけど、寂しいな」

「まさかとは思うけど……今日仕事休んで帰って来たのって、二匹が引き取られるかもしれないから？」

「他にそれ以外の理由でもあるのか？」

「……呆れた」

あっさりと肯定され、溜息混じりに春香は首を横に振った。

大人らしい対応を見せたかと思ったら、やはり根本的なところは子供と同じ理屈で動いているのだらう。ただ呆れた反面、素直に“彼らしい”と思えてしまうのは不思議な事だ。

「ねえ、おじさん」

「……何だ？」

「別に“お別れ”って言っても、この子供が幸せになれるお別れなんだから……そんなに悲しがらなくてもいいんじゃないの？」

信之が座るソファアの膝置きの上に腰掛け、彼を見下ろした姿勢で春香は静かに言った。

「私のパパやママみたいに……死んじゃったら永遠にお別れで、もう幸せにもなれないし、二度と会えない……。それは寂しくて悲しいけれども、この子供はそうじゃないでしょ？」

「……………」

「だからほら、いい歳した大人がそんな顔しないの」

「……………」

何も言わずバツが悪そうに目を逸らした信之の頭へ手を伸ばし、自分の胸元へと僅かに引き寄せる。そのまま、彼の黒い髪を撫でながら春香は微笑んだ。

てつきり二十以上歳が離れている相手に子供扱いされた事に対し、怒られるかと思ったものの、信之は何も言わずに黙ったままだった。

「……ハル」

「何？」

暫くの間は黙って髪を撫でられていた信之だったが、突然視線を合わせる事無くぽつりと春香の名前を呼ぶ。

「お前……俺の事、絶対大人だと思っていけないだろ？」

「ええ。働いている以外は、何か大人らしい事でもやってくれたかしら？」

「俺、一応……お前の保護者なんだが……」

「だから何？」

「……いや、いい」

彼が噤んだ言葉の先は、大体察しがついていた。だからこそ、春香はその言葉の先を自ら告げる形で答える事にする。

「全く……。素直に言いなさいよ。私に『お養父さん』って呼んで欲しかったら、もっとしつかりしなさいよね……」

春香の口から飛び出した言葉を聞いて、驚いた様子で信之は春香の顔を見上げる。だがその表情は春香の想像していたものとは違い、目を細め今にも泣き出しそうな表情だった。

「……おじさん？」

予想していたものとは明らかに違う信之の反応に、春香は違和感を覚えるものの、不思議とそれを追求しようとは思わなかった。彼と共に暮らし始めて数年経つ春香に対し、信之が初めて見せた



表情だったからこそ余計詮索する気になれなかった。というのが正しいのかもしれない。

それに、何故そこまで悲しそうな表情をするのか？と聞いてしまえば、それまで築き上げてきた彼との関係がいつも簡単に崩れ去ってもおかしくは無い、と春香の本能が激しく警鐘を鳴らしていた。

無論、日常の些細なやり取り程度で崩れてしまうような関係では無いと思いつつも……、春香の心は微かばかり動揺していた。

変化した信之の気配を察知してか、単に腹が減っただけなのか？彼の膝に乗っていた子猫達が浅い睡眠から目覚めて小さく動きはじめる。

一瞬そちらに春香が目を奪われ、再び信之の顔へと目を戻した時には既に……、  
彼は普段と変わらない、のんびりとした様子で子猫達を見て微笑んでいた。

もしかしたら、単に見間違いだったのかもしれない。

春香がそう錯覚してしまう程にまで、“普通”に戻った信之は……、

寝ぼけ眼で欠伸をしていた子猫達を撫で、落ち着き払った優しい笑顔を浮かべていた。

素直になれば、楽なのにね。

自分があと少し若ければ、もっと我儘に振る舞えたのかもしれない。

あるいは彼女があと少し歳を重ねていれば、もっと的確に言葉を告げたのかもしれない。

だが結局の所、幾ら嘆いても現実は何一つ変わらない。ましてや事態が好転する事も無い。

自分は感情のまま動くには歳を取り過ぎ、想いを打ち明けるには彼女は若過ぎた。

それは……、紛れもなく変える事が出来無い現実でもあり、真実でもある。

だからこそ 彼女が幸せに暮らせる様、自分が最大限の努力を行う選択のみしか、愛を表現する手段が無かった。

勿論、今でもその決意は変わらない。こうするしか、方法は無いのだから……

口論のきつかけは、本当に些細な出来事だった。

“春香の帰りが遅く、それを信之が彼女に問い詰めた” 末に起きた口論だった。

これまで春香の帰りが遅くなる事に対して、親子とはいえ直接血の繋がりが無い信之が口うるさく咎める事が無い様、心掛けてはい

た。  
この春に進学し、高校生として節度のある行動をしてくれるのなら……、別に養父として彼女には何も言う必要も義理も無い。と信之は無理矢理自分に割り切るよう納得させていたからである。

そこに信之が抱く感情を織り混ぜるのは不適切であり、何より彼一人だけの我儘で春香を束縛するような行為だけは控えなければいけない、という想いが強く作用していた。

自分は彼女の亡くなった両親に代わり、良き父として振る舞う事が第一である。まかり間違ってもそれ以外の行動は取るべきものではない。自身にそう言い聞かせてきたものの……、覆った偽りは悠久に隠し通すなど不可能である。今回は、信之がそれに薄々気付き始めた矢先に起こった出来事だった。

たった一人きりとなった食卓で、信之はもう何杯目かも分からなくなつた酒を煽る。

言い合いをした最後に、『貴方は私の何なの？』と大きな眼に涙を浮かべた春香に質問を投げ掛けられ、思わず口籠ってしまった己を今となつてはただ罵る事しか出来無い。

信之から何も答えが返つてこなかった事が余程腹立たしかったのか、手に持つていた鞆を彼へと投げつけた後、春香は自室へ閉じ込もってしまった。

もしも直後に彼女の部屋へと行って名前でも呼べば、事態は好転していたのかもしれない。ただ信之にはそれすら行う勇氣も無く、無意味に時間だけが過ぎ去る結果となっていた。

開けば自身への悪態しか飛び出さない口に、度数が強い酒を勢い良く流し込む。

最初は喉を焼くアルコールの感触に酔って多少なれども気は紛れ

ていたのだが、何度も繰り返した今ではそれすらも既に感じない。  
単純かつ機械的な行動しか出来無い自分が、今の彼にとっては非常に腹立たしかった。

今日は金曜日という事もあり、いくら飲んで二日酔いになろうとも明日は休みだ。仕事には差し支えは無いものの、酒に溺れたからといって春香と交わしてしまった口論の解決にはならない事は分かっていた。

「俺はあいつの……、俺はあいつの……」

気付けばグラスを手にもったままの姿勢で、義理の娘に投げ掛けられた質問を何度も反復している事に信之は驚く。ただ、幾度反復しようが肝心な答えが飛び出すことは無い。

頭の中では既に結論は何年も前から出ている。にも関わらず、それを口にする事は憚られた。例え独り言としても口にしてしまったが最後、どうにかなりそうで怖かったのだ。

視線を床へと落とし、不意に足元で止まる。先程春香が投げた時のまま、鞆の中身が無残にも散らかり、床へ広がっていた。

各教科のテキストやルーズリーフ、筆記用具を見る限り彼女が家に一度も帰らなかった何よりの証拠がそこには広がっている。

春香は学校が終わったと同時に何処かへ出掛け、そして帰宅が遅れた。

これまで通り『帰りが遅くなるから夕食が作れなくなる』と春香からの電話はあったものの、信之の神経を最も逆撫でたのは……帰りが遅くなった事でも、彼女が一度家に戻らなかった事でも無い。彼にとって最も許せなかったのは、春香が連絡として掛けてきた電話が原因だった。

あの時、何気無い彼女との会話に割って入ってきた賑やかな男性の声を思い出すだけで、数時間経った今でも信之の胸は痛む。

彼女の名を親しげに呼んだ声の主に苛立ち、呼ばれて即座にこちらとの会話を打ち切った春香にも怒りを覚えて収まらない。そして

何より 遅かれ早かれ訪れる未来を想定しながらも、それを素直に受け止める事の出来なかった自分自身が、信之には信じられなかった。

表面上はいくら繕ったところで、春香にも信之の僅かながらの変化は感じ取られたのだろう。

家へと戻って来て、彼女が開口一番に告げた謝罪の言葉は弱々しく、普段の信之ならば逆に彼が謝っても不思議ではない程だった。

何故、あそこで彼女を許さなかったのだろうか？

何故……、言い洩る春香に対し、さらに言葉の追撃を行ってしまったのだろうか？

何故……、

素直に義理の娘を『娘』として扱えなかったのだろうか？

答えなどは解り切っているにも関わらず、結果などはどうにも変わらないにも関わらず、信之の内心では、相変わらず自問自答が止まらない。

喉の奥から決して酒のものでは無い感触がせり上がり。

信之は手に持ったグラスをテーブルの上へと戻し、声を出す事無く静かに涙を流した。

自分が一体、どういう経緯でベッドに倒れ込んだのか、殆ど記憶に無い。

声を殺して泣き続けるにも疲れ果ててしまったし、無茶に酒を煽

った反動で半ば夢の世界へと誘われている今の感触が心地良い。

自分の呼吸以外は何も聞こえてこない静寂の中、そのまま睡魔に意識が引き摺られてゆくのが分かる。今は何も考えたくは無い、取り敢えずは夢へと落ちたい……。

一度は覚醒した意識だったが、再びまどろみ始めた時だった。

何かが髪に触れる感覚とほんの僅かに漂う気配を捉えた伸行は、閉じていた瞼をゆっくりと上げる。

ずっと瞳を閉じていた為、明かりを灯していない暗闇の中でもある程度の視界は確保出来ていた。ただ、視界に入った細く白い腕と、自分を静かに見下ろしている義理の娘を見て何度か瞬きを繰り返してしまう。

何故春香が此処に立って自分の髪を撫でているのか、一体彼女はいつから此処へやってきて立っていたのか、伸行には全く解らなかった。

身体を起こし、何故彼女が此処にいるのか訊ねようかとして一瞬迷う。

だが衝動的に身体を起こしたとしても、数時間前に言い争った事を考えると到底言葉を交わしたところで平然を保てる自信は皆無だった。

春香の方も恐らくは、信之が寝ているものとしてこの場に立っているに違い無い。そう判断して、姿勢を崩す事無く信之は再び瞼を閉じた。

何故彼女が此処に訪れたのかは分からなかったが、暫くして眼を覚ます気配が無いと分かれば、きっと部屋から出て行ってくれるだろう。これからの接し方は、明日目が覚めた後にでも考えればいい。ろくに思考が回らない脳が導き出した最善の結果に従おうと、酒の酔いに身を任せる。

再び眠る為、意識を春香から逸らそうとした伸行だったが……耳が捉えた微かな声と共に、その決意はいとも簡単に崩れ去ってしまった。

「……さい」

最初はそれが彼女の声だとは認識出来なかった。それ程にまで聞こえてきた声はか細く、同じ響きの繰り返しであった。

「……さい。ごめん……な……さい……」

アルコールに侵された伸行の思考でそれが謝罪を述べる言葉であると認識出来たのは、髪を撫でる春香の指に力が込められて暫くしてからのものである。

伸行の髪を撫で何度も謝罪の言葉を繰り返している春香だったが、何故謝られるのか彼女の意図が伸行には全く理解出来無い。ただ彼女の声が耳に入る度に戸惑いだけが訪れ、彼の内心を激しく掻き立てる。

時折謝罪の言葉が鼻を吸る音で途切れているのに気付いた時には、信之は無意識のうちに髪を撫でる春香の手首を掴み、彼女の小さな身体を自分の元へと引き寄せていた。

「……え？」

戸惑う春香の声と共に、信之に手を引っ張られバランスを崩した上半身がベッドに倒れ込む感触が訪れる。続けざまに信之はもう片方の腕を伸ばし、彼女の細い腰を抱き寄せ春香の全身をベッドの上へと寝かせた。

「ちよ、ちよっと……」

突然無言で腕を引っ張られた拳句、抱き寄せられた事に戸惑う春香の声が聞こえる。だが、彼女はほんの少し身体を動かしただけで抵抗する気は無いらしい。

腕の中に春香の小さな身体がすっぽりと収まったのを確認した後、信之は少しずれた布団を手繰り寄せ、春香の肩の位置にまでそれを被せた。

彼女が泣いているのを知り咄嗟に抱き寄せたものの、掛ける言葉など到底見つからない。

暫くの間何も言わずに春香の長い髪を撫でただけだったが、最初

にその沈黙を破ったのは彼女の方だった。

「……起きてたのに何も言わなかったなんて、性格悪いと思う」

「ハルの声が聞こえたから、目が覚めた」

「……嘘つき」

「何故嘘と言い切れるんだ？」

「だって、いつもは……」

「いつもは？」

さらに言葉が続けようとしたところで、胸に軽く小さな拳が当たる。“それ以上は促すな”という春香の無言で行った意思表示に、信之は言葉を飲み込んで押し黙った。

一つ深い溜息をついた後、本来信之が彼女に言わなければならぬ一言を告げる為に口を開ける。ゆっくりと小さく、彼女の耳元へ口を寄せて呟いた。

「春香、すまなかった」

日頃呼ばれている愛称とは異なり、名前を呼ばれた事で腕の中で春香が反応する。

彼女の返事を待ってもよかったのだが……、もしも想定外の言葉を投げ掛けられたとすれば、それに対して適切な単語を繋いで返す自信など今の信之には無かった。

「謝るのは、俺の方なのにな……」

もう一度、今度は自嘲の意味合いも含めて言い放つ。

普段ならば大して気に留めてはいけなないと心掛けていたにも関わらず、自らの感情に任せて彼女と口論をしてしまった非は信之にある。それに……、春香にとって自分は義理とはいえ親権者にあたる事実は決して変わらない。

彼女に“貴方は私の何なの？”と訊ねられ、即座にそれを口にすることが憚られたのは、彼女を裏切る行為を行ってしまったと言っても過言では無かった。



もう一度、小さく「すまない」と呟いた後伸行は、彼女の柔らかな髪が伸びる首筋に顔を埋める以外の行動が行えなかった。

「本当……、どっちが子供だか分からないわね」

呆れた様に吐いた春香の溜息が、伸行の耳に掛かる。先程まで彼女が漂わせていた弱々しい雰囲気はいつの間にか消え去り、普段通りの振る舞いだった。

「貴方は私のお養父さんなんだから、もっと強く振る舞えばいいの。娘は親の言うことを聞くものでしょ？」

彼女が耳元で優しく溢す言葉に対して、伸行は何も答えない。

肯定すればそれが嘘だと露見しかねない恐怖と、反面否定すれば彼女に対して伸行が抱いている感情を知られてしまう。

結局はどちらの選択も取り損ね、ただ俯いて口を閉ざす他無かった。

「ねえ、一つだけ聞いても……いい？」

何も言葉を返さず、頷くことすらせず、ただ黙っているだけの伸行に春香は一呼吸開けた後に言葉を続ける。

「えっと、あのね……あの……」

無言を肯定と捉えたのだろう。少し躊躇しながらも、ゆっくりと言葉を紡いでゆく。

「……おじさんは、私に“お義父さん”って呼ばれるのは……嫌なの？」

ためらっていたものの、春香の告げた言葉は余りにも的確であった。

彼女に投げ掛けられた疑問に対し、偽りの返答を返そうとする伸行の心が憚られる。

軽く首を振って「事实は事実であり、俺はお前の養父だから……そう呼ばれて嫌なわけが無い」と答えるだけの単純な行動が行えない。決して嘘では無い事実ですら肯定できない自分自身に苛立ちを覚え、伸行は奥歯を噛み締めた。

「そういう態度を取られると……私、勘違いしてしまうんだけど……？」

伸行の予想に反して戸惑い、口籠る春香が告げた言葉の意味を理解し損ねる。

意味を聞こうとして上げた伸行の顔は、慌てて伸ばされた春香の手によって再び彼女の首筋へと埋もれた。

「顔……見ないで」

若干震えた声は小さく、普段聞きなれた春香のものでは無い。恐らく、先程気丈に振る舞っていたのも精一杯の虚勢だったのだろう。今の様子を見る限り、それは容易に想像がついた。

「私に勘違いさせるおじさんが悪いのだけど……でも本当だったら嬉しい。でも……もし違ってたら……だよね……だって、私まだ子供だし……」

頭を押さえつける手を小刻みに動かし、口籠りながらも独り言の様に言葉を繰り返す春香の態度は落ち着かない。

最初のうちは戸惑いながらも彼女の言葉に耳を傾けていた信之だったが、徐々に言葉尻を濁らせてゆく春香が何を言いたいのかようやく理解出来た頃には、自然と口端が上がっていた。

微笑みが漏れるのと同時に、心の内に数年もの間押し留めていた様々な想いが途端に軽くなった気がする。

無論それらを完全に払拭する事は叶わなかったが、自然と口から声が飛び出した。

「春香」

「……何よ？」

「俺は今までお前を子供扱いや“保護者”としては接してきたが……娘”として接した事は一度も無い。……つまり、そういう事だ」  
軽く数度春香の小さな背中を叩いてやり、信之は微笑みを浮かべたまま顔を上げる。

今度は頭を押さえつけられる事は無かったものの、驚いた様に大

きな眼をしきりにぱくりさせる春香の顔が目の前にあった。

目が合って数秒後には口を尖らせ、彼女は恥ずかしそうに俯く。暗闇で顔色こそは解らないものの、恐らく顔は赤くなっているに違いない。色が白い彼女の頬へ掌を当ててやると、拒否される事無く受け入れられたのが信行には嬉しかった。

「勘違いをしたいのならば、すればいい」

「……ちゃんと、具体的に言って欲しいんだけど……」

「俺の立場も、少しは考えてくれ……」

無然と言い放たれたものの、信之には苦笑しか返す術は無い。

彼女の言う通り具体的な言葉を述べるのは簡単だが、自分の立場と春香の年齢を考えると到底言えるものではない。ましてや二人が共通の想いを抱いていたとしてもだ。

なかなか自分の眼を見てくれない春香の前髪を掻き上げ、信之はそつと彼女の額に唇を押し当てた。続いて顔と同様、赤くなっているであろう耳へ口を近付け、普段口癖の様に告げていた言葉を二言三言告げてやる。

それは、普段からことある事に告げていた言葉だったのだが、彼女も信之が意図していた内容にようやく気付いてくれたらしい。  
「……馬鹿。格好つけて言っただって、お酒臭いから説得力なんて無い……」

涙混じりで返してきた文句はそれで精一杯だったらしく、後は嗚咽に阻まれて春香は言葉を失った。

信之に抱き締められながらも彼女は泣きじゃくり、背中をさする彼に対し何度も「馬鹿」「私の悩んだ時間を返して」「あんな事寝ているからって言うんじゃないかった」などと、信之には全く意味の解らない言葉と罵りを繰り返すだけだった。

腕の中で子供の様に肩を震わせて泣く彼女を抱き締めたまま、ふと信之は初めて春香を引き取った六年前を思い出す。

両親を失ったばかりのショックから立ち直れず、毎晩泣いて夜を

過ぐす彼女を抱き締め眠った日と状況こそ違えど今の状態と酷似した感覚を覚える。あの時と抱く感情こそ異なるものの、結局は自分にとってこの少女の存在は決して欠けてはならない存在なのだろう。六年前に出会った時と比べ、長くサラリと伸びた春香の髪を何度も優しく撫で……。

信之はゆつくりと瞳を閉じながらも、義娘でもあり想いを抱いた少女が泣き疲れて眠るまで、腕の力を緩める事無く彼女の身体を抱き締め続けた。

自分があと少し若ければ、もっと我儘に振る舞えたのかもしれない。

そう思っていたのは、結局は無駄に生きてきた年月が錯覚させたものだったのだろう。

あるいは彼女があと少し歳を重ねていれば、もっと的確に言葉を告げたのかもしれない。

それもただの思い過ごしであった。彼女は充分自分の気持ちを汲んでくれていたのだ。

だが結局の所、幾ら嘆いても現実は何一つ変わらない。ましてや事態が好転する事も無い。

咄嗟に行ってしまったとはいえ、現実は変わり好転もするということを知った。

自分は感情のまま動くには歳を取り過ぎ、想いを打ち明けるには彼女は若過ぎた。

歳を取ったのは自分だけでは無い、彼女も成長をしている事

を何故忘れていたのだろうか？

それは……、紛れもなく変える事が出来無い現実でもあり、真実でもある。

事実は変わらずとも、関係が変わる事を自分は知った。

だからこそ 彼女が幸せに暮らせる様、自分が最大限の努力を行う選択を取り、愛を表現する手段を取ればいい。

想いは決して変わらない……  
彼女が笑ってくれるのならば、自分が背負う犠牲など容易いものだ。

「義父」と「義娘」  
一人の少女と一人の男の關係に、ほんの少しだけ変化が訪れたのは……

彼女が目覚めた次の日から、  
昨晩起きた口論の原因を、彼女が彼を無理矢理起こして説明させてからの事である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2457r/>

---

嘘と罰

2011年6月20日04時25分発行